

2023年8月20日 主日礼拝

説教題「主の慈しみは壁を越えて」マタイ 8章 5～13節

主任牧師 加藤 誠

「イエスはこれを聞いて感心し、従っていた人々に言われた。『はっきり言うておく。イスラエルの中でさえ、わたしはこれほどの信仰を見たことはない』(マタイ8章10節)。

一人の百人隊長がイエスのもとに来て懇願しました。「主よ、わたしの僕が中風で寝込んで、ひどく苦しんでいます」と。この言葉を発端として主イエスと百人隊長との間で交わされた対話が今朝の箇所ですが、わたしにとってはとても清々しいものを感じる箇所です。この百人隊長はなかなかの人物です。こんな上司だったら居たらいいのになと思うような人格と品格を兼ね備えた人です。そして主イエスはこの対話を通して、信仰における大切なことを弟子たちに教えられたのでした。

この百人隊長はカファルナウムに駐屯していたローマ軍の司令官と思われます。その司令官がユダヤ人のイエスに頭を下げることは通常ありえないことでした。ユダヤを植民地として支配しているローマ兵は、通りがかりのユダヤ人に「この荷物を運べ!」と命じることができ、ユダヤ人はその命令がどんなに理不尽でも従わなければならないのが普通であったのです。ユダヤ人がローマ人に頭を下げることはあっても、ローマ人がユダヤ人に頭を下げることはあり得ないことでした。

この司令官は、自分の妻とか子どものことではなく、自分の身の回りの世話をしている召し使いのことで頭を下げています。ローマ将校の召し使いは、ローマに占領された国の者が徴用されるのが普通でしたから、たぶんユダヤ人であったことでしょう。ローマ将校の病気には軍隊に同行しているローマ人の医師が診察に当たったのでしょうから、ユダヤ人の召し使いのことはユダヤ人に治させようということだったのかもしれませんが。それにしても誰か使いをやればよいものを、このローマの司令官は自らイエスのもとに出向いて、自ら頭を下げたのでした。部下思いの心をもち、ユダヤ人に対して尊大で傲岸な態度をとることもしない、この司令官の人柄がここににじみ出ています。

一方で、このローマの司令官の懇願を受けた主イエスは、すぐに「わたしが行って、いやしてあげよう」と答えられました。相手がローマ人だからと身構えることなく、かと言ってもったいぶるでもなく、フラットで自然な姿勢です。主イエスという方は、相手の肩書、地位、年齢、性別によって態度を変えることはありません。常にだれに対しても同じ地平で、上から目線でもなく、下から媚びを売ることもなく、同じ人と人として対等に出会っていかれた方であることが、この場面からも伝わってきます。またユダヤの律法では「異邦人(異教徒)の家に入ってはならない」と禁じられており、「入った者は神の前にケガレル」と教えられていましたから、「ローマ兵の家に行く」などということは誰の口からも絶対に出てこない状況の中で、主イエスはそのような「差別と偏見の壁」を軽々と超えられたのでした。

すると、その主イエスの言葉を聞いた司令官はこう答えます。「主よ、わたしは

あなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません。ただ、一言おっしゃってください。そうすれば、わたしの僕は癒されます」と。この言葉に主イエスは感心して、従っていた人々に言います。「はっきり言うておく。イスラエルの中さえ、わたしはこれほどの信仰を見たことはない」と。

この司令官の言葉にはユダヤ人の信仰に対する敬意があります。「異邦人の家の中に入ったら、ケガレルぞ！」というユダヤ教の教えはローマ人にとっては「けしからん」「ナンセンス」な教えのはずですが、主イエスにそんなことをさせてしまったら迷惑をかけてしまうことを司令官は知っていたのでした。そして「どうか、お言葉をください。言葉だけで十分です」という信仰告白の言葉が語られたのです。

「言葉だけで十分です。お言葉をください」。なんとというチャレンジな言葉でしょう。しかし事実、言葉には力があります。命があります。言葉が人を生かし、逆に言葉が人を殺すこともあるのです。つい最近話題になったある会社の副社長のLINEでの言葉には目を疑いました。「死ね死ね死ね」「死刑死刑死刑」。これを受けた人の心には刃が突き刺されて血が流れたはず。一方で、たった一言が、人を生かし、人を救うのです。その人のことを心から思っている言葉。愛の言葉が大切に届けられるとき、たった一言が、その人に命を吹き込むのです。このローマの司令官は、その一言の重みと力を知っていたのでした。ただ、この司令官の優れたところは、その一言をもらうために彼は自ら主イエスのもとに足を運び、主イエスの前に、自分の召し使いのための祈りの言葉、癒しの言葉をいただきたいと頭を垂れたのでした。言葉が命をもつために行動が必要なことを彼は知っていたのです。

そして、このローマの百人隊長との出会いと対話の後半において、主イエスはユダヤ人たちが大切にしてきた信仰を厳しく問い直しています。ユダヤ人たちは神さまを愛することに非常に熱心でした。神さまを愛するゆえに、神さまを知らない異邦人とは付き合わないと決めていました。日常生活ではローマ兵の前で頭を下げて、従うふりをしながら、心の中では異邦人であるローマ人をさげすんでいた。表の顔と裏の顔を使い分けて、心の中ではシャッターを下ろしていたのです。けれども、その姿勢ゆえに、君たちは信仰において大切なものを見失ってはいないか…と主イエスは問いかけられます。それは神を愛する者は、隣り人を自分のように愛すること／敬意をあらわし大切にすることに押し出される。神を愛する者は、異邦人を自分のように愛する、自分と同じ人として愛することに押し出される。神の愛は、人がつくり出す隔ての壁、差別、偏見の壁を超える。その神の愛を知ることにおいて、このローマの百人隊長は君たちよりもずっと信仰的だということに気づかないのか？…と問われたのです。

今朝の週報巻頭言には「関東大震災百年」と題して、百年前の震災で起こった朝鮮人への虐殺という史実に目を向けながら、今の自分たちの課題を重ねて考えるの大切さについて書かせていただきました。主なる神さまが私たちに招いておられる神の国はどのようなものであるのかを繰り返し聖書から聴き続けていきたいのです。